場所　山梨県北杜市

面積　3.45ha



活動目的

八ヶ岳地域の在来植物を取り込み自然の理に適った美しい環境を創造することにより、年間50万人の来園者に生態系の豊かさや重要性を気づかせる。環境教育の場、レクレーションの場として存在し、また地域生態系の保全や再生、希少種の保護に貢献することを目的とする。

サイト概要

ナチュラルガーデンズMOEGIは、萌木の村株式会社の敷地内にある。2012年から有限会社ガーデンルームスに業務を委託、ランドスケープデザイナーのポール・スミザー氏（ガーデンルームス取締役）が立案し計画・造成監理・植栽した。自然生態系に配慮し在来種の植栽や自生種の誘導、無肥料・無農薬での管理などを行い、多種の植物が良好に生育し、それにより誘導された多くの昆虫類等が確認されるなど、清里地域の生態系を復元している。ナチュラルガーデンズMOEGI内には、ホテルや遊具施設なども点在し有数な観光地となっている。

土地利用の変遷

1938年清里開拓入植当時はアカマツを含む雑木林だった。平地は畑に開墾され蕎麦や根菜類の畑だった。1960年代国道に沿ってドライブインや民宿を建設、山林を切り開いた。一部カラマツの植林もした。1970年代山林を切り開き、ホテル、レストラン、博物館、土産物ショップを次々に建設、中央広場は牧草畑、野菜栽培畑→芝生広場に、イベントも開催した。施設周辺のガーデンエリアは、バラ園、キッチンガーデン、コスモス畑など様々な試みをしてきた。2012年からポール・スミザー氏のナチュラルガーデン造成が始まり、石積みと花壇の造成、その後植栽というサイクルを繰り返す。中央広場はウッドチップの広場へと変遷。周りの山林はアカマツ、カラマツ、雑木の混成で密集していて、下層はほとんどミヤコザサという状態だった。アカマツ、カラマツを伐採、雑木もまびくことで下層に光を通すことで様々な山野草が芽吹くことになった。

サイト周辺の環境

西に国道１４１号（清里ライン）に面し、東には400mほど離れ大門川が流れている。標高は1200m、植生的にはブナクラス域であり、周辺の主な植生は大門川に向かってオニグルミ群落、クリ-コナラ群集等があり、カラマツの植林も見られる。

アピールポイント

萌木の村は標高1,200mの高原リゾート「清里」にあり、年間来場者50万人を誇る。Natural Gardens MOEGIは萌木の村にとって重要な観光資源として来訪の目的になっている。ポール・スミザー氏やメンテナンススタッフによるガイドウオークも実施されていて、環境教育の教材的な意味も持っている。今後は学校教育の機会や企業研修の題材になっていくことが期待できる。また、除草に関しては、薬剤を使わず手抜きで行っている。

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

八ヶ岳地域の在来植物を組み込んで自然の理に適った美しい環境を創造することにより、年間５０万人の利用者に自由な散策やガーデンガイドツアーなど環境教育事業を通じ生態系の豊かさや重要性を気づかせるとともに、美しい植栽による癒しの場やウォーキングなどのレクレーションの場の提供を行っている。また、在来種の栽培講座や種子販売等により地域生態系の保全や再生、希少な種の受入れによりその保護に貢献している。

【主な植生】

標高は1200m、植生的にはブナクラス域であり、ガーデン内では生態系に配慮し、草本では自生種を株分けで増やし、また、清里地域で減少してしまったオミナエシなど在来種を植栽している。木本ではリョウブ、ヤマボウシなどが自生し、ブナやエゴノキなども植栽されている。

【確認された主な動植物など】

植物では生態系に配慮し、草本では在来種のオカトラノオ、フジアザミなどや、昆虫が好むクラ等など、また、美しい景観の創造のため原種の各種バラ、各種ギボウシなども植栽している。また、自生種を株分け等でガーデン内に誘導している。木本ではリョウブ、ヤマボウシ、ウリハダカエデなどが東側自然林を中心に自生してる。また、絶滅危惧種は自生地では危機的状況だが、生育方法を確立しガーデン内では良好に生育している。以上、植物では絶滅危惧種を含む約249種が生育している。

動物では、哺乳類では、イノシシが東側の自然林方面からガーデン内に侵入している。鳥類ではメジロ、シジュウカラなど低山帯の鳥からルリビタキなど亜高山帯の種が観察され、ジョウビタキは毎年数ペアが繁殖している。また、両生類・爬虫類では石積の隙間を利用しヤマカガシやニホントカゲなどが生息している。昆虫類では、ヒヨドリバナにアサギマダラなどの各種のチョウや、また、オミナエシなどの花にはハナムグリなどが見られる。以上動物では哺乳類１種、鳥類39種、両生・爬虫類６種、昆虫類114種が生息している。



写真の説明：ナチュラルガーデン内のクジャクチョウ



写真の説明：来園者に植物の説明をする状況

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容

自然生態系に配慮し、在来種の植栽や自生種の誘導、昆虫類の蜜源となる植栽など多種の植物を無化学肥料・無農薬で良好に生育させ、また、植物に誘引され多くの昆虫類や鳥類が生息するなど、清里地域の景観や生態系を復元してきており、現在の環境の保全を目的に下記の５つのゾーン毎に活動していく。

①水辺のガーデンゾーン
　岸辺植物の切り戻し等の管理により美しい景観を維持、自生種など多様な植栽により昆虫類の食草や蜜源植物を確保し、生物が生息・生育しやすい環境を保全
②草原のガーデンゾーン
　減少した草原性植物や依存生物を保護するため草原性植物の植栽や管理
③森林のガーデンゾーン
　森林の間伐等により明るい森林景観を維持し、切り株での昆虫類への環境づくりや、多くの生物のため林内に階層構造をつくり保全
④その他ガーデンゾーン
　自生種を含む植栽等で観賞価値を創り、石積み等により生物に環境の提供
⑤オープンスペースゾーン
　来園者の憩いの場、夜行性動物の狩場、石積み等により生物に環境の提供
⑥絶滅危惧種の保護に関する活動（各ゾーン共通）
　高い技術のもと絶滅危惧種を可能な限り受け入れ保護
⑦文化的サービスの提供に関する活動（各ゾーン共通）
　６月を中心に講演会、観察会、ガーデンウォークなど各種環境教育事業を実施

モニタリング計画の内容

【モニタリング対象】
ガーデン内の全植物及び動物（哺乳類、鳥類、両生・爬虫類、昆虫類）

【モニタリング場所】
ガーデン内全域

【モニタリング手法】
植物については目視、動物については下記の調査を実施
①総合ルートセンサス　　②参加型モニタリング調査
③固定カメラによる定点調査　　④絶滅危惧種調査　⑤夜行性動物調査

【モニタリングの実施時期及び頻度】
植物については、通年実施
動物については、総合ルートセンサスを毎年四季毎に4回実施し、また、各モニタリング調査は最低年1回は実施する。

【モニタリング実施体制】
全体の総括は萌木の村株式会社木内氏が行い、日本MAB計画支援委員の村山氏がサポートする。
植物については有限会社ガーデンルームス職員の指導のもと、萌木の村株式会社庭メンテナンス担当チームが実施する。動物については萌木の村株式会社職員と専門家の協力のもと実施する。（2024年については環境省の専門家派遣試行事業により専門家の北原正彦氏の指導を受けモニタリング実施）